

感動の仕掛け人たち

（影の立役者は語る）

南那珂地区の和牛生産の力を見せつけた今回の全共。その舞台裏にはJAや行政の技術員など、たくさんの支えがありました。約4ヶ月間、通常の業務をこなしながらも朝夕欠かさずに出品牛の世話をし、全てを捧げた裏方の彼ら。代表して3名の立役者に話を聞きました。



「かなりきつかった。今まで背負っていたものをそつと降ろすことができました」と話すのは内野さん。今回初めて全共を経験した内野さんは、県代表にする候補牛を選定する時期からだならぬ重圧を感じていたと言います。「自分が選定し、生産者にも了承をいたたき、調整を始めていた牛がいたんです。すごく努力してもらって良い牛に仕上がっていたんですね。最終選考で候補から外れてしまつたんですよ。生産者としては、ここまでやつてきたのに気持ちは当然ですね。相当まつたんですよ。生産者として、生産者の気持ちと、大東地区から今回こそは出品したいという想いを抱えてしまつて、毎日押し潰されそうでした」。

しかし、その逆境こそが内野さんの原動力だったともいいます。「とにかくやれることをやるだけ。そんな状態だったかなと思います。その気持ちだけが自分を動かしていましたね」。

「過去に、県代表戦で最後の最後に和田さんが負けてしまったことがあります。あの感動をどう表現して良いかわかりません。苦労しましたけど、そんなことより本当に本当に牛がよく頑張ってくれましたね」。

代表が決まる前から、5区に出品した和田さんの牛舎に度々訪れていた内野さん。県代表に決定してからは、担当技術員を務めました。

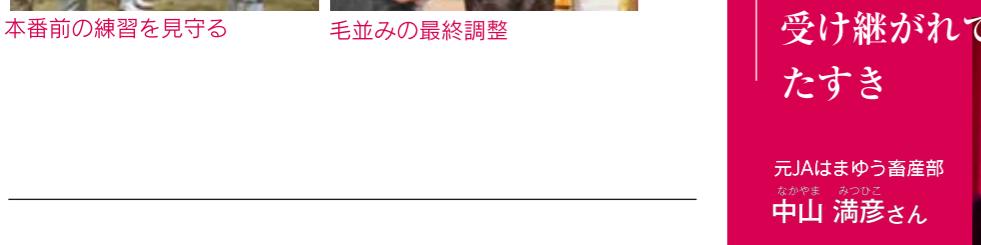


会場でも牛舎の掃除を協力して行います
南那珂家畜市場で牛の規格を測る技術員たち

そんな日々が続く中でも吉田さんは一度も投げ出したくなる気持ちは芽生えたことはなかつたといいます。「これが私たちの仕事なわけです、その責任もありました。それよりもそんな気持ちがあつては牛の世話を大変苦戦したといいます。牛に失礼ですかね」と一心不乱に打ち込んできた吉田さんですが、牛の世話に大変苦戦したといいます。「初めは牛が全く自分と向き合つてくれませんでした。大会向けに普段と違つたことをされます。警戒心がすぐかつたのでしょうね。とにかく慣れてくれませんでした」。

そんな状況にも次第に変化が現れます。「毎日声かけをして触つてたんですけど、いつからか自分の姿を見るなり寄つて来るようになつてました。なでてやると気持ち良さそうな表情まで見せるようになつて」。

牛との確かな信頼関係を築き上



40年にわたり南那珂の畜産の発展に貢献し、全共でその栄誉が称えられ登録事業功労者として表彰を受けた中山さんは元技術員の立場として話します。「技術員のみんなに大きな拍手を送りたいと思います。彼らの頑張りが結果に大きくなつがつたのでしよう。農家のみなさんからも評判が良くて、みんなが自信を持つて堂々と取り組む姿を見ていると嬉しくなりますね。前回より出品頭数が増えてもなお、結果を出しているというところは、牛と人が確実に成長し、改良の歩みが正しい方向に進んでいたという証なんです。結果を受けて、現役時代の仲間と自分たちがやつてきたことは間違つていなかつたと確認し合うことができました。これからも発展を続けていくために、前進を続けて欲しいですね」。